

神を説く僧——中世学僧たちの神道——

林 東 洋

題旨説明（伊藤聰）

中世神道の主流を度会氏の伊勢神道から吉田兼俱の唯一神道に見ようとする立場は、従来の神道史研究に多く見られるが、その広がりや言説の多様性、周辺文芸への影響から見ても、中世神道の中核にあったのは、仏教系神道であつた。

平家の南都焼き討ちによつて焼亡した東大寺の再建事業が惹起した、僧徒による伊勢參宮の隆盛は、最初は東大寺関係者に始まり、次第に幾多の諸宗・諸流に拡がつた。そのなかから両部神道書と呼ばれる仏教系神祇テキストが現

れる。『中臣祓訓解』『天地靈覚秘書』『兩宮形文深积』『麗氣記』などである。このうち、特に『麗氣記』は、『日本書紀』と並ぶ神書の中核的テキストとしての地位を獲得し、その伝授に当たつて、密教の秘説伝授と同様の灌頂作法が行われ、血脉や印信も作られた。伊勢神宮周辺におけるかかる動きは、三輪山・室生山・叡山にも及び、それぞれ独得な秘説・伝書を形成するようになる。

鎌倉後期・南北朝期になると、中世神道にまつわる伝書・印信は、真言・天台等の諸流派を回路として各地の寺院に広がり、そこで学ばれるようになった。たとえば、称名寺の第二世の釩阿は『書紀』『麗氣記』をはじめ、伊勢・両部神道書や切紙も多く收集した。釩阿は神道書のみなら

ず、顕密諸流の様々な伝授を受けて、それらの聖教の収集に努めており、神道書の集書も明らかにその一環であつた。

彼が指向したのは、仏教的知の総合化であり、神道はその

体系の中に明確に位置づけられるものであつた。ここに、

中世の僧侶たちの神道説に対する認識が如実に現れている。

このような組織的収集が行われるようになつたことで、それを基礎として、神道をめぐるさらなる言説の形成が展開していつたのである。

今回のセッションでは、特に南北朝期以降の言説形成を担つた代表的な僧徒の事蹟とその思想内容について採り上げる。それは次の三名、すなわち、天台僧として山王神道の道統を受けながら、度会常昌との交流により伊勢神道・両部神道にも通じた慈遍、浄土宗の学僧として著名な人物ながら、『日本書紀』・『麗氣記』・『古今和歌集』の注釈書を編んだ聖岡、そして、吉田兼俱の曾孫に当たり、唯一神道の教理と祭儀の確立に尽力した梵舜である。

本セッションでは、生きた時代とその背景を異なる三人の僧徒が、どのように〈神〉の問題に向き合つたかを検討することを通じて、中世神道説が南北朝から室町時代を通じてどのように展開し、変容していくのかを辿る。さらにそれが近世の非仏教的、排仏的神道を生み出すに至つたことも視野にいれて考えたい。

報告一 慈遍の神仏論（林東洋）

本発表は、南北朝期を中心に活動した天台僧・慈遍（生没年不詳）が神仏の関係、また神道と仏教の関係をどのように論じたのかを追い、さらに根本枝葉果実説との関連を探る中で、彼の視野の広がりを確認すること目的とした。

慈遍はト部吉田家の出身であり、天台教学・山王神道説に通じたのみならず、伊勢神道・両部神道の説にも深い理解を有した。先行諸説への広い眼差しを持つ「兼学」の僧であった彼は、『先代旧事本紀』を軸に据え、陰陽の理論を縦横に駆使しながら諸説の折衷・統合・止揚を図り、独自の神道説を展開した。先行研究によれば、その思想は〈仮本神迹〉の本地垂迹説に対し、〈神仏同体〉の考え方経て、〈神本仏迹〉の反本地垂迹説へと移行する嚆矢をなすものであると評価されるが、これまでの論考では、「①神と仮の関係」、「②神道と仏教の関係」、また「③日本・中國・印度の関係」の三点を明確に区別せぬまま論じられてきたように見受けられる。以下順に確認すると、①『旧事本紀玄義』、『豊葦原神風和記』によれば、慈遍は安易に神仏同体を言うわけではなく、神仏を判然と区別すべきだと考えている。神仏は本来不二であるが、天神の代の末に穢

れが生じ、地神の代の末には人心がすっかり汚れてしまつたため、人々を教化する役割が神から仏へと受け継がれた、とする。②慈遍は神道と仏教（さらに儒教と道教）の教説に勝劣はつけない。あくまでも時代背景や教導の対象である衆生の機根に従つて教化の方法が異なるに過ぎない、と考える。③日本の国土を神聖な地とみなし、日本と他国との関係を体と用で説明している。それは、伊勢神宮をはじめとする各地の社に神々の神体（神宝）が祀られていることによつて裏付けられる。

従来の研究は慈遍の説に「本地垂迹か否か」という枠組みを当て嵌めることで単純化し、彼が構想した神仏の関係や、「神道」の語の持つ意味の広がりを矮小化してきたきらいがある。慈遍の思想の全体像を理解するには、彼自身の文脈に沿つて検証することが求められよう。

慈遍が引く『悲華経』の「仏は滅後には大明神になる」という文は、仏本神迹を説くものと解釈されてきたが、釈迦出生は地神の代の末だから、天地開闢以来の神と神道が、生身の仏・仏法に先立つとするのが慈遍の考え方である。一方で、『天地神祇審鎮要記』（以下『要記』）の「山王の権跡は神道より出る」という偈文は、神本仏迹説の根拠となるようにも読めるが、前後の文脈から判断すると神道・仏教の年代的な先後関係と、諸神が法華円教を守護することを

示しているに過ぎない。また『要記』では大通智勝仏の成道譚と天岩戸開き神話、提婆達多と素戔嗚尊の悪行の相似を挙げ、開闢以来の伝承の共通点から「仏は即ち神である」ことが述べられるが、ここで仏と神は本地・垂迹の関係ではなく、同一あるいは同列の存在として描かれているのである。

なお、慈遍の著作には「大日靈貴天照大神」の記述が散見され、『要記』には「三世常住の大日如来を釈迦と名づける」とあるので、大日靈貴との関係から天照と釈迦を同列の地位に置いたことが窺える。また釈迦は靈鷲山と比せられる比叡山に住して諸神の本地となるが、帰するところは一なる神道であるとされる。ここに至つて、慈遍のいう神道とは、宗教宗派の区別をするときに使用する「神道」の語より、広範な意味を有することが理解される。それは歴史的には仏教・儒教・道教に先行し、それらの教説の拠所ともなる根源的な道であり、三国に通じる普遍的な真理であつた。

日本・中国・印度の三国は一氣が分かれて現れたものであるが、前述のように日本が他国より優れた国土であり、特別な靈地であることが示される。ここにおいて、全世界に通用する普遍的な真理である神道が「日本國の道」として捉え直される。慈遍は、天皇と仏とが互いに教化を助け

合うことで国を統治するのが理想だと考へ、日本の王であり・天地の徳を体现し・仏の加護を受けた一人（天皇）が、中国・印度を含めた天下をしろしめす存在であるべきだと主張するのである。畢竟、兼学の僧・慈遍の神仏論は、日本を神国とみなし、天皇に世界的な役割を付与する方向に取扱があるのであつた。

報告二 了誉聖問の神道論（鈴木英之）

了誉聖問（三四一～四二〇）は、浄土宗第七祖として知られる鎮西流白旗派の学僧である。常陸国を拠点として活動した聖問は、幅広い学問を修めたことで知られる。特に神道の研究を精力的に行い、独特な神道論を展開した。本発表では、「兼学」という視点から、聖問の神道論の特色と意義について考察した。

南北朝から室町期において、浄土宗は公の一宗と認められておらず、他宗派からの強い批判にさらされていた。そこで聖問は、諸派錯綜していた教学を整備し、伝法制度を確立することで浄土宗の地位向上・独立教団化を図った。この際に、他宗派の教義や、世に流布する思想・信仰を研究し、それらを浄土宗を中心として位置付ける作業を行つた。いわゆる兼学である。専修念佛というと、念佛以外で

きないような印象があるが、じつは法然や弁長ら浄土祖師も、浄土教学の深い理解のため兼学を推奨していた。とくに聖問の白旗派では兼学の旅に出る伝統があり、聖問の神道研究もその点において異端的なものではなかつたと考えられる。むしろ、聖問は優秀な学僧だつたからこそ、自宗の正統性を示すために神道を学ぶ必要性を強く認識し、本格的な研究にとりくんだと考えるべきだろう。

聖問の神道論は二つの側面をもつ。ひとつは「浄土教神道論」、もうひとつは「既存の神道論の類聚・整理」である。ひとつめの「浄土教神道論」とは、浄土教学による神道解釈をいう。浄土系諸派では、専修念佛という教理上の制約を保ちながら、神祇信仰をはじめとする諸信仰と折り合いをつけることが課題とされた。聖問は『鹿島問答』で、阿弥陀仏以外の全ての仏・菩薩・神を垂迹とし、本地阿弥陀仏のもとに包摂するという特殊な本地垂迹説を説いた。さらに往生淨土のための本尊として阿弥陀仏ささえ祀つていれば、雜行ではあるが、傍らに神々を安置・礼拝することを認めることで、浄土教学から逸脱することのない理論的な神の位置付けを行つた。また『麗氣記拾遺鈔』では、各宗派の教理そのものを「神体（大元尊神）」とし、独自の教相判釈により、浄土宗の神体（大元宗祖神）が最勝であると主張し、さらに浄土宗の神体を念佛の功德と同一とするこ

とで阿弥陀仏と神との完全な同体を説いた。これらは、難解な聖道門（難行）ではなく、末法の凡夫に適した淨土門（易行）を選択すべきという法然以来の主張を神々に適用したものであった。

もうひとつの「既存の神道論の類聚・整理」は、晩年に行われた『日本書紀』『麗氣記』の註釈活動の中で見られる。ここでは両部神道論にもとづく解釈がなされ、淨土教学はまったく見られないため、常陸の真言宗の一派である願行流の説を主な情報源として秘事口伝の類を類聚・整理したものと推測される。

こうした聖問の特色は、ほぼ同時代に活躍した天台僧・良遍と比較することにより明らかとなる。良遍の著作では、口伝・切出が多用され、師資間の伝授が学問的大きな柱だったことがうかがえるが、聖問著作には口伝の類がほとんど見られず、『日本書紀私鈔』『麗氣記私鈔』などのように自らの兼学の成果としての書物が中心で、学問的な意味合いが強い。この極めて学問的な神道論が展開された理由としては、聖問が淨土宗の学僧という立場にあつたことが大きい。専修念佛の行者にとって、信仰対象は阿弥陀仏だけであり、それ以外の尊格は「一次的な存在とならざるを得ない。だが逆に神との間には常に一定の距離があるからこそ、冷静な視点から神を眺めることが可能となる。つまり、

天台や真言の僧侶たちよりも、神を淨土教理にひきつける必要性が低かつたからこそ、自由な立場から様々な神道論をとらえることが可能になつたと考えられるのである。

聖問は、新たな淨土教神道論を創り出そうとした一方で、既存の神道論を整理・記録したことから、彼の著作は当時の知・学としての神道のあり方をかなり忠実に記録したタイムカプセルのような価値を有しているといえよう。聖問は、学僧の「兼学」のありかた、学問としての神道のかたちをうかがううえで、注目されるべき人物と考えられるのである。

報告二 「梵舜」再考

——中世の終焉から近世黎明期を生きた
学匠の光と翳（原克昭）

あまたの古典書写で知られる吉田社神宮寺別当「神龍院梵舜」（一五五三～一六三二）。研究現況において「梵舜本」の存在はよく知られてはいても、神仏論として際だつた発展がみられないことから学問的評価も低い。また、梵舜の日記『舜旧記』は同時代の霸權者たちの動向を窺い知る資料として着目されているが、その実態は未解明な点が多い。

そもそも、研究現況において「梵舜」という存在への関心は、もっぱら「梵舜本」の存在に限定されていた（『沙石

集『平家物語』『太平記』『日本書紀』など)。いわば「梵舜本」の一人歩きと「古典」化による文化的動態の形骸化もしくは本人不在現象である。そうした傾向は文学研究に顯著であり、また歴史学においても徳川家康の神葬をめぐる「東照宮」論争の敗北者の隻影として認知されるにとどまる。しかし、改めて「梵舜」の存在じたいをたどりおこしてみたとき、そこには中世末期から近世初頭における学問環境とその動態が透視されてくる。

『舜旧記』をひもとくと、激動の時代における文武の学問的動向を窺い知ることができる。たとえば、天理図書館吉田文庫本『元元集』は「梵舜本」と知られる一本。その識語にしたためられた貸借・書写の経緯は、さながら『舜旧記』に当該記事を見いだすことができる。現存書物と識

語と動態がたしかに連環した事例である。また、「日本紀の家」たる吉田家学については、実兄・吉田兼見の亡き後、その存続すら危ぶまれた危機的状況下において、梵舜は兼治・兼英・兼起と続く吉田家学の後見役として、したたかに活動し続けた。ときには若輩の当主に成り代わって出仕する場面すらあつたのである(寛永元年・後水尾天皇への『日本書紀』進講)。

かつて報告者は「兼見・梵舜が一介の御用学者的存在となつたのは、しかるべき時代の趨勢」であつたと評価をし

たことがある(『『日本書紀』進講史・断章—「日本紀の家」盛衰記』)『文学』一〇〇八年五・六月号、拙著『中世日本紀論考』法藏館、一〇一二年に増補収載)。梵舜の文化活動と彼をとりまく学問環境は、中世家学から近世学派へと展開してゆくながで、まさしく「日本紀の家」の終焉そして近世黎明期の陰画として読みとれる。

本報告は、「梵舜」自身の存在を焦点化し、その学問動態を指標として、〈中世日本紀〉の世界から近世初頭におけるト部吉田家学の経緯と「神道史」の過渡的環境を見据えなおした一箇の試みである(セッション会場では梵舜が関わった「書物の移動」の詳細な表を配布したが、本稿では紙幅の都合で割愛する)。

コメント (彌永信美)

「趣旨説明」における「中世神道の主流を度会氏の伊勢神道から吉田兼俱の唯一神道に見ようとする立場は、從来の神道史研究に多く見られるが、その広がりや言説の多様性、周辺文芸への影響から見ても、中世神道の中核にあつたのは、仏教系神道であつた」という指摘は、大きな意味を持っている。かつて黒田俊雄が、中世において主流だつたのは顯密仏教であり、「異端派」だつたのがいわゆる鎌

倉新仏教の諸派だった、と主張したように、中世神道に対する認識の大転換を促す意見だと思われる。事実、ほとんどの神道書が寺院の聖教の一部として保存され、流通したことは明らかである。ただし、この考え方には、いくつか乗り越えるべきポイントがある。例えば、これまで伊勢神道の中核的な文献とされてきた、いわゆる「神道五部書」などはどこに位置させられるのか、という点である。これは、ある時期から明確に現れてくる、仏教的な語彙や概念を意図的に避けるような文献・言説はどこに位置させられるのか、という問題とも密接にかかわってくる。

今回の発表はすべて、中世後期に属する人々の言説にかかるものである。中世初期の神道関係の文献はほぼすべて「偽書」であり、弘法大師等の偉人に仮託される。著者の個人の名が出てくるのは、度会家行『類聚神祇本源』あたりから、つまり十四世紀前半以降である。それは、それまでにほぼ出そろっていた思想の原石から、より明確な何ものかを抽出しようとする、コメントタリーの時代であつたともいえるだろう。

今回のパネルは、「中世学僧たち」ということで括られているが、学僧と言つても時代背景や社会的な位置づけなどには差異がある。慈遍と梵舜は、学僧というよりも、「吉田家出身者」という項で括つた方が適当かも知れない。

事実、彼らが残したのは仏教よりも神道関連文献の方が多い。一方、聖岡は「学僧」の名にふさわしい人物であり、彼が神道の教養をもつていたのは自然なことである。中世の僧侶の大部分が「兼学」だったのであり、それが結果的には「顕密仏教的」な言説を拡散させたとも言えよう。

三人の学僧を個々に取り上げるなら、慈遍は革新的な思想を表明した人として突出している。使い古された仏教の語彙をあえて避けて、当時の人びとにとつて新鮮に響いたであろう中国的・儒教的な語彙を使つたのではないかと考える。一方、聖岡は、阿弥陀如来を究極の根源に位置づけ、あらゆる仏、菩薩、神々をその顕現として理解しようとした。この首尾一貫した論理性は、インド、中国、日本という文化的差異をあえて無視して、すべてを阿弥陀仏の視点から見通す、強い普遍主義への志向が感じられる。梵舜については、学僧というより一人の文化人と見た方が自然かもしれない。梵舜が関わった厖大な書物の移動を見ると、十五世紀頃から顯著になる日本古典の集積の運動の中で、彼が大きな役割を果たしていたことが見えてくる。古典や漢籍ではない「日本の古典」が形成される過程で決定的な意味をもつた巨大な知のネットワークの中で、梵舜も一つの重要なノードに数えられるべきであろう。

「知のネットワーク」という視点は、今回の発表対象と

された三人を考える場合に有意義である。中世は、個人というよりも人々のネットワークが大きな意味を持った時代だったといえる。慈遍の説は後の二人に比べると個人的見解の色彩が濃いとはいえ、やはり、吉田家や度会常昌らとの関係から彼の思想が生み出されたのであろう。聖問については、当時の「兼学」のネットワークの中で彼を位置づけることがきわめて重要である。兼学・兼修は、中世における知の独占形態として顕著であった口伝主義や知の秘伝化の傾向と矛盾するようでありながら、同時にそれを補完するような機能も果たしたのであり、今後注目すべき研究テーマだと思われる。さらに梵舜に至ると、知の秘伝化の傾向がほぼ終焉に近づく瞬間を捉えられる。閉じられたネットワークが公開され、秘事口伝が平板化していく時代である。不干齋ハビアンが『妙貞問答』で吉田家の秘事を取り上げて揶揄する一節があるが、これも、こうした歴史状況を示す傍証と言えるだろう。

司会者の弁（門屋温）

前年の大会で中世の発表者がゼロであったことに衝撃を受けて、伊藤氏とのパネルを企画した。周知のように、中世、特に中世前期の神道書は、作者や成立年代も明確で

ない偽書の類が多い。従来の思想史研究では低く見られる傾向のある、こうしたアノニマスの思想をどのように研究の俎上に載せるかという点に、我々中世神道の研究者は腐心してきた。一方で、近世の思想研究にしばしば見られるような、思想家個人に還元あるいは収斂してしまう研究方法に対しても強い不満を感じてもきた。思想が人間の営みであることに異論はないが、それがいかに偉大な思想家であつたとしても、その思想を個人の心性に還元してしまつては思想史研究としては「負け」だと思う。

そのため、今回のパネル企画にあたっては、どうしたら「慈遍はこう言っている」「聖問はああ言っている」というような話で終わらせずに、議論の方向性を見出せるかということを発表者たちと話し合ってきた。その結果、彼らが出したひとつ目の答えが「中世における学のありよう」というコンセプトだった。これは慈遍だけ、聖問だけ、あるいは梵舜だけに注目していくは得られなかつた視点だろう。三人並べてみるとことによつて、変らないもの、変つたものが見えてきた。さらには、中世から近世にかけての「学のありよう」の連続と非連続が浮き彫りになつてきたようだ。そしておそらくそれは、「近世の学問」をも問い合わせ手がかりを与えてくれるものであると考える。

当日、あえて「ぜひ近世・近代の研究者の意見を伺いた

い」と言つたのは、そういう意図があつてのことだつたが、残念ながら不発に終わつたようである。また、質問をいただいた方々には申し訳ないが、質問内容が資料の読み等、個々の発表についてのものにとどまり、企画全体に関する質問や意見は伺えなかつた。企画の意図が充分会場に伝わらなかつたことについては、司会者の力不足を恥じるところであり、反省するところでもある。

(学習院大学非常勤講師)